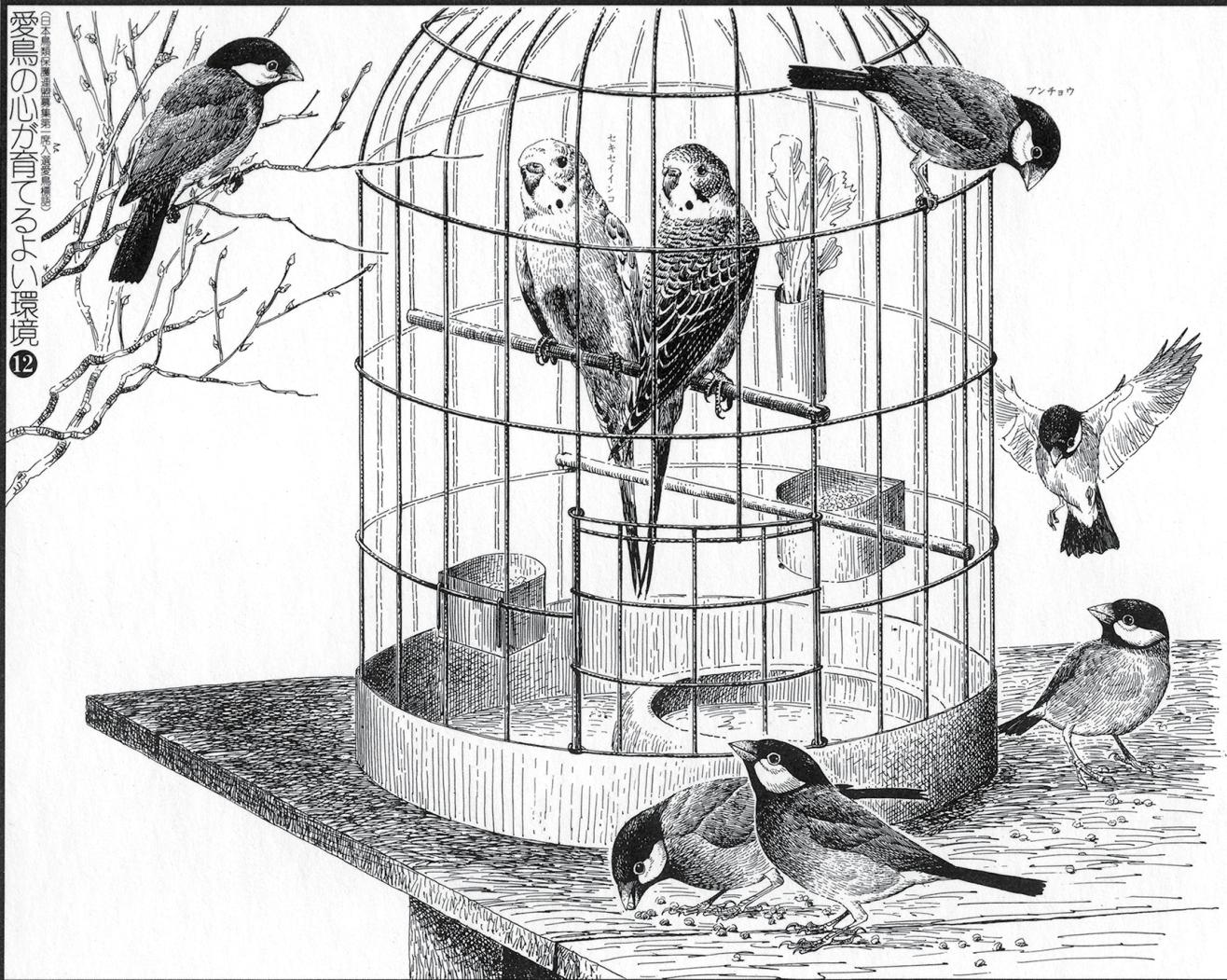


ヒトは籠のトリにしてよいか か



パンチョウやインコの来る庭……？

ちかごろ、飼い鳥の野・化が目立ちます。東京山の手に住むAさんの家は、庭のエサ台にパンチョウがやつてきますし、また、Bさんの家の庭には、数種類のインコの仲間が、いちどに20羽以上も来ることがあります。

川原などに野鳥の姿をなぞねてみると、野鳥図鑑でなく飼い鳥図鑑が必要くらい、野生化した飼い鳥——日本の自然にとってのいわばヨソ者を見かけることが多くなりました。とくにベニズメやキンバラは、各地で増えていることが記録されており、あるいは強・ダバトなどは、全国での姿を見ないところはほとんど、日本の一例——野鳥としての権利をもち立ってしまいまる。

そして、籠の中では見れなかつたはずの外國産のトリが、日本の野外で見られるようになつたことを、めずらしく、「よろこぶべき出来事」であるかのように考へる人も、少なくありません。けれども、庭にパンチョウやインコがきたからといって、よろこんでいいものでしょうか。

〈籠のトリ〉が『野のトリ』を滅ぼす……？

ヨソ者が増えているのは、トリの世界だけではありません。野生化し、繁殖するようになったヨソ者の生物のことなど、帰化植物、帰化動物といふものが、都市の郊外や川原などでは、そもそも本にあつた種類よりも、帰化生物の方が多い場合もあります。そして、すでに帰化生物にその地位をうばわれ、姿を消しきつまる生物もあるのです。メダカとタップミノウ、日本のタンボポとセイヨウタンボポの関係などが、それです。

トリについていえば、野生化した飼い鳥が、在来のトリをおびやかしてしまいます。しかし国外では、ハワイでは、ハツシオトリなど、ハツシオトリ類の数種が絶滅した原因として、ヒトが移入したトリにその地位をばわれたことが引きりしている例があるようです。日本でもその危険性は十分にあるといえます。(つまり、野生化したトドリが見られるようになつたことは、日本の野のトリの生活がおびやかされる危険にさらされている、ということなのです)。

ヒトと自然のバランスのなかの一員

私たちはこのシリーズを通して、自然界は「持ちつ持たれつ」の関係にあり、その絶妙なバランスによって生物が保たれているという話をお話してきた。そして、その自然のバランスをこなすのは、ヒトに多いこと、それによって、とりかえしのつかない状態になつた事を、いくつもあげてきました。いなくなつてからでは、遅い。トリも自然の「員」なら、じつもまた同じです。憲法によつて保護されているはずの、私たちの最適な生活环境を守りはじめて、そしてそれを保つづけていくためには、このトリたち、生物たちも大きな限りを持つものだということを、知つていただきたいと思います。



**法人 日本鳥類保護連盟
サントリ一株式会社**

●この広告は、財團法人日本鳥類保護連盟の指揮を得て、サントリ株式会社がシリアルズとして制作したものです。